

<p>ドルパダ (Drupada) 1章4節</p>	<p>パンチャーラ国の王（偉大な王国の支配者）ドリシュタデムナとドラウパディーの父。ドローナの元親友。 若いころ、ドローナ（後に軍師になるブラフミン）と深い友情を育んでいた。かつて「必要なら国の半分をあげる」と約束していたが、ドローナがその約束を信じて訪ねてきたとき、身分の違いを理由に拒絶し、侮辱してしまう。 この出来事が、ドローナの復讐心を呼び起こし、のちにクル王国の戦火につながっていく。 ドローナに対抗するため、「ドローナを倒す息子がほしい」と神に祈る。 ドルパダは、冷たい王ではない。むしろ、自分の誇りや国を守ろうとして、“誰かを突き放すしかなかった”人間的な王</p>
<p>ドリシュタケートウ (Dhṛṣṭaketu) 1章5節</p>	<p>チェディ国の王。シシュパーラの息子。父をクリシュナに殺されたが、パーンダヴァを支持。 父シシュパーラは、かつてクリシュナを侮辱しすぎてスダルシャナ・チャクラ（円盤）で斬られた。 の息子であるドリシュタケートウは、本来ならクリシュナやパーンダヴァに恨みを持っていても不思議ではない。 しかし彼は、個人的な感情よりも「義」と「真理」を選び、パーンダヴァ側についた。 憎しみを継がずに、誇りを継いだ王であり、大声で語る英雄ではなく、在り方で語る英雄</p>
<p>チェーキタナ (Cekitāna) 1章5節</p>	<p>ヤーダヴァ族（クリシュナと同族）の名門戦士 若手の戦士たちが激情や復讐心を燃やす中で、チェーキタナは沈着冷静で、静かな意志の強さを持つ。 彼の名前「Cekitāna」は、「洞察に満ちた者」「見抜く力を持つ者」といった意味 派手な武勇伝よりも、軍全体のバランスをとるような存在。しかし戦術と弓術に長け、前線でも決して怯まずに戦った。 終盤にはカルナら強敵と戦い、勇敢に散る</p>
<p>カーシー国の王 (Kāśirāja) 1章5節</p>	<p>古代インドで名高いカシ王国の王。 戦場では高名な弓の名手。 威厳と気品のある王者。勇気と武力を兼ね備えた君主。 ドゥルヨーダナが豪勢な布陣を整える一方、カーシの王は理と真実に従いパーンダヴァに味方した。 パーンダヴァ側が“武力だけでなく文化と魂の支持”を受けていることの象徴</p>
<p>プルジット (Purujit) 1章5節</p>	<p>パーンダヴァの母クンティの親戚（クンティの兄弟）。 クンティ族出身の将軍。特別な武術の技ではなく、義と忠誠を背負って戦う“まっすぐな武人”。 ドゥルヨーダナが名前を挙げたということは、それだけ敵からも評価されていた実力者。 「“母なる力”を男として戦場で体現した、クンティ族の名誉の守り人」</p>